パリの国立東洋語学校と明治日本の美術交流をめぐる調査報告
——シェフェール、デュ・ブスケ、蜷川式胤

陳岡めぐみ

パリのセーヌ河畔の閑静な住宅街に位置する国立東洋語文明研究所(以下、INALCOと表記)は、国立現用東洋語学校を前身とする。フランスではじめての日本語講座がレオン・ド・ロニイによって設置されたことからも、日本とは早くから関わりの深い教育機関である。しかしこの東洋語学校を通じて、開国間もない日本にフランスから多数の興味深い挿絵入り美術書が送付されたこと、そして明治の文化財行政の功労者として近年注目を集めている蜷川式胤(1834-1882)が同学校と関係を結んでいたことについてはほとんど知られていない。今回、パリの国立公文書館とINALCO、および東京の国立国会図書館等における調査から、明治日本とフランスの美術・文化交流における興味深い資料が見つかった。本稿はその調査報告である[1]。

1. シャルル・シェフェールと書籍交換

国立東洋語学校は、1870-90年代、「中興の祖」と称される学長シャルル・シェフェール(Charles Scheffer 1820-1898)の下で大幅に東洋語書籍の蔵書を増加させる[2]。シェフェールは自身も各地を旅行して書籍収集に努めたほか、1872年には外国特派員(les correspondants étrangers)制度を設立し、諸外国政府との書籍交換事業を進めた。交換用の書籍には、同校刊行物のほか、文部省から提供された書籍が使われた。最初に任命された特派員たちは、タンジール、コンスタンティノープル、ラホール、カルカッタ、ボンベイ、上海、バンコク、サイゴン、サンクト・ペテルスブルク、チベット、そして東京(江戸)など、北アフリカからロシア、極東までフランスから現地へ派遣されていた外交官や研究者たちである。東京では、幕末から明治にかけて数回の外交使節団とともに通訳として渡欧した経験を持ち、後にジャーナリストとなる福地源一郎(=桜痴　1841-1906)と、1867年にフランス軍事顧問団の一員として来日し、維新後は明治政府に出仕したアルベール・シャルル・デュ・ブスケ(Albert Charles Du Bousquet, 1837-1882)が任命されている。デュ・ブスケについては後述する。こうして当初は5000冊ほどだった蔵書は、シェフェールが死去した1898年には50000冊以上に達する。

この書籍交換事業に日本は早い時期から関わっている。1872年4月頃、フランス文部省は同校に、日本政府と書籍交換をするための行政と科学関係の書籍を与えている。また、INALCOの書籍受入簿を見ていくと、日本政府の側からの寄贈は1872年10月29日に「一群の書籍」が送られて以降、1890年代初頭まで続いた。文学や歴史、風俗から社会経済まで幅広いこれらの書籍の概要は国文学研究資料館の協力下に編まれた蔵書目録に見ることができる[3]。

2. フランス側から日本側へ送られた出版物について

さて日仏間で行き来した書籍のなかでも興味深いのは、下記表に示した1873年から75年にかけてフランスから日本へ送られた美術書を中心とする出版物である。aは1873年12月18日付リストで、フランスの文部省は、中国と日本、ビルマの政府へ贈るための書籍類50数冊をシェフェールへ与えている。必ずしも日本へ送られたとはかぎらないが、参考までにすべて挙げた。またbとcは1875年1月28日付リストで、明確に日本政府へ贈るための書籍としてシェフェールへ提供された。これらのうち、確認できた範囲では半分強が現在は国立国会図書館に所蔵されている。末尾の（　）内に冊数、［　］内に［国］の後に国会図書館の所蔵番号を入れた。また後述する東京書籍館時代の目録に収録されているものは*印を付けた。

表

a 1873年12月18日[4]

1. Barbet de Jouy, *Les gemmes et joyaux de la couronne*（王室の宝飾品）, 1865, 2 vols.（1部）
2. J. Spencer Northcote, *Rome souterraine, résumé des découvertes de M. de Rossi dans les catacombes romaines*（地下のローマ、ローマのカタコンベにおけるド・ロッシ氏の発見の摘要）, 1872（1部）
3. E. Aubert, *Trésor de l'Abbaye de Saint-Maurice d'Agaune*（サン=モーリス・ダゴーヌ修道院の宝物）, 1872（3部）
4. Ch. Blanc, *L'Oeuvre de Rembrandt: catalogue raisonné de toutes les estampes du maître et de ses peintures, orné de bois gravés, de quarante eaux-fortes de Flameng, et de trente-cinq héliogravures d'Amand Durand*（レンブラント作品集　巨匠の全版画と油彩画のカタログ・レゾネ）, 2 vols.（2部）
5. *id.*, *La grammaire des arts du dessin*（デッサン文法）, 1867（3部）
6. T. Gautier, *La nature chez elle*（ありのままの自然）, 1870（3部）［国Sc-50］
7. V. Place, *Ninive et l'Assyrie*（ニネヴェとアッシリア）, 1867（1部）
8. *Le Budget mis à la portée de tout le monde*（誰もがわかる予算）, 1849（3部）
9. P. Chabat, *Fragment d'architecture: Egypte – Grece – Rome – Moyen age – Renaissance – Age moderne – etc., avec notices descriptives*（建築断片　エジプト・ギリシア・ローマ・中世・ルネサンス・現代）, 1868（2部）［国Sc-54］
10. E. Ciceri, *Cours progressif de paysage*,（風景画の上級講座）, 1857（3部）
11. F. Gillet, *Enseignement collectif du dessin par démonstrations orales et graphiques*（口頭と図解の教示によるデッサンの集団教育）, 1869（3部）［国116-124］
12. H. du Cleuziou, *De la poterie gauloise, étude sur la collection Charvet*（ガリアの製陶について、シャルヴェ・コレクションに関する研究）, 1872（2部）
13. Pascal Coste, *Monuments modernes de la Perse*（ペルシアの現代の記念物）, 1867（1部）
14. J-B. Delambre, *Rapports à l'Empereur sur le progrés des sciences, des lettres et des arts depuis 1789. 1, Sciences mathématiques*,（1789年以降の科学、文学、諸芸術の進歩に関する皇帝への報告）,［v. 1808］（2部）
15. G. Demay, *Inventaire des sceaux de la Flandre*（フランドル地方の印章目録）, 1873（1部）
16. C. Ferret, *Rudiment du dessin*（デッサンの基礎）, 1853（3部）［国116-54］
17. A. Jacquemart, *Histoire artistique, industrielle et commerciele de la Porcelaine...planches gravées...par Jules Jacquemart*（磁器の芸術・産業・商業的歴史）, 1861, 3 vols.（2部）［国 115-1］
18. Ch. Garnier, *A Travers les arts, causeries et mélanges*（諸芸術を通して　談話と雑纂）（3部）
19. H. Houssaye, *Histoire d'Apelles*（アペレスの物語）, 1868（3部）［国91-26］
20. Racinet, *L'Ornement polychrome. Cent planches en couleurs... contenant environ 2.000 motifs de tous les styles, art ancien et asiatique, moyen âge, Renaissance,*

XVIIe et XVIIIe siècles...(多色装飾図集 古代から、アジア、中世、ルネサンス、17、18世紀の芸術にいたるまであらゆる様式の約2000のモティーフを収録［…］), ［v.1869-73］(2部)［国Sa-22］
21. A. Michiels, *Voyage d'un amateur en Angleterre*(ある愛好家のイギリス旅行), 1872(3部)
22. E. Chesneau, *L'Art et les artistes modernes en France et en Angleterre*(フランスとイギリスにおける芸術と現代の芸術家), 1864(3部)
23. *id.*, *Les nations rivales dans l'art*(芸術における競合国家), 1868(3部)
24. Ch. Garnier, *Le théatre*(劇場), 1871(3部)

b 1875年1月28日付[5]
1. E. Lièvre, *Tableaux et dessins* (choisis dans le *Musée universel* et dans les *Maîtres anciens et contemporains*…)(絵画とデッサン)［186-？］［国54-16］
2. *id.*, *Meubles d'art, oeuvres choisies dans les collections célèbres*(有名コレクションから選んだ芸術家具), ［186-？］［国749.24x-L722m］

c 1875年1月28日付[6]
1. F. Pharaon, *La Caire et la Haute Egypte* [Dessins de A.Dentu](カイロと上エジプト), 1872［国916.2x-P536c］*
2. Cadart, *L'Illustration nouvelle, 1868-1874*(新しい挿絵) *
3. Lélius, *Les Maîtres dans les arts du dessin de Montant. Album de l'Egypte Moderne*(モンタンのデッサン芸術における巨匠たち 現代エジプト画帖)＊帝国図書館の洋書目録にのみ収録［国52-65］*
4. Leroy, *Choix de dessins de Raphaël*(ラファエロのデッサン選), 1858［国50-47］*
5. Piot, *L'Acropole d'Athènes*(アテネのアクロポリス), 1858［国913.385x-P662a］*
6. *L'Art pour tous*, 1869-1874(ラール・プール・トゥス(皆の芸術))［国53-20］
7. R. Merlin, *Origine des cartes à jouer*(トランプの起源), 1860
8. Yvon, *Les sept péchés capitaux*(七つの大罪), 1868［国W-10］*
9. E. Rouger, *Les appartements privés de l'Impératrice*(皇后の私室), 1867［国50-54］*
10. A. Darcel, *Trésor de l'Eglise de Conques*(コンクの教会の宝物), 1861［国 63-78］*
11. T. Abraham, *Album de Château-Gontier* [=*Chateau-Gontier & ses environs: trente eauxfortes par T.A.*](シャトー・ゴンティエの画帖), 1863［国54-31］*
12. E. Domenech, *Manuscrit photographique américain précédé d'une notice sur l'idéographie des Peaux Rouges*(アメリカ・インディアンの表意文字法に関する解説序文付きアメリカの写真手稿), 1863
13. A. Garnier, *Les Thèrmes de Luxeuil* [*Histoire de la ville et des thermes de Luxeuil (Haute-Saone) depuis les temps les plus recules jusqu'a nos jours*](ルクソールの共同浴場跡), 1866［国53-22］
14. Rosa Bonheur, *Grands Etudes*(大型習作［?］) *

内容は考古学や民族学からゴーティエの詩画集まで幅広いが、全体的に挿絵入りの文化・芸術関係の大型出版物が多いのが特徴である。古代遺跡や教会の宝物などフランス国内外の歴史文化遺産を写真図版で紹介した書籍のほか(fig.1)、美術教育に関係する挿絵入り出版物も目立つ。美術史的には、リール美術館のウィカール・コレクションのラファエロの素描にもとづく大型石版画集(c-4、figs.2,3)や、写真技術と版画による図版入りのレンブラント作品集(a-4、figs.4,5)、『神曲』を題材とするA・イ

fig.1
c-5から「パルテノン」(写真:ビオ)

fig.2
c-4からヴァチカンのラファエロ《アテネの学堂》の壁画のための習作（画:ラファエロ、石版画:ルロワ）

fig.3
c-4から《アルバの聖母》のための写生習作（画:ラファエロ、石版画:ルロワ）

fig.2

fig.3

fig.4

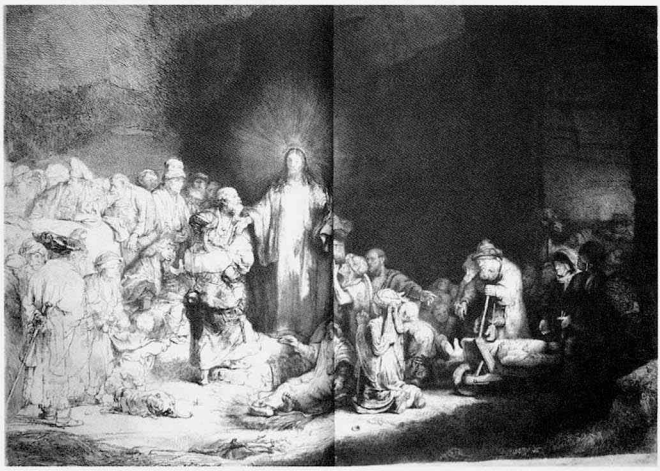


fig.5

fig.6

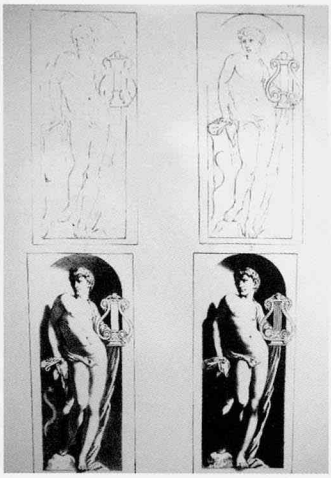


fig.7

fig.4
a-4から《アダムとイヴ》（画:レンブラント、ヘリオグラヴュール:アマン=デュラン）

fig.5
a-4から《100フルデン版画》（画:レンブラント、エッチング:フラメング）

fig.6
c-8から《怠惰》（画:イヴォン、石版画:ジャコ）

fig.7
a-11から

ヴォンの油彩画を複製したロマン主義の大型石版画集（c-8、fig.6）などを挙げておきたい。また、現所在の確認はできなかったが、美術行政にも大きく関わった美術史家シャルル・ブランによる『デッサン文法』（a-5）はフランスで長いあいだ美術教育のスタンダートとなった書籍である。3冊提供されていることから、日本へも送られた可能性は高い。デッサン教育については、ジレやフェレの著作（a-11,16、fig.7）が国会図書館に残されている。19世紀のエッチング復興の立役者として知られる版元カダールが1870年代に出版したエッチング集（c-2）の行方も気になるところである。なお、動物画で一世を風靡した女性画家ローザ・ボヌールのGrands Etudes（c-14）は出版物ではなく、大型の習作素描を指すと思われる。

一方、各国の美術品や工芸品から集めた多数の装飾図案・モティーフをカラー図版つきで収録したラシネの装飾図集（a-20）は19世紀の応用芸術運動における重要な出版物であり、当時、頻繁に参照されていた。またジャックマールの『磁器の歴史』3巻本（a-17、fig.8）は良質な大型エッチング図版を多数入れて東西の磁器の歴史を紹介した大部の著作である。ジャックマールについては後述する。19世紀後半、産業への芸術の応用とその教育の重要性が唱えられていくなか、フランスでは古今東西の美術品・工芸品を版画や写真で複製した図版入りの出版物が頻繁に出版された。b-1、b-2はとくにこの分野で活躍したエドゥアール・リエヴルの著作であり、b-1のほうは『ミュゼ・ユニヴェルセル（万国美術館）』誌や『古今の巨匠たち』など自分が関係した出版物から、個人コレクションや美術館が所蔵する絵画や装飾芸術品の複製版画を中心に再録したものである。工芸品のほか、収録画家はオールドマスターから19世紀アカデミスムの大家、バルビゾン派まで幅広い（figs.9-11）。また、c-6は副題を「産業・装飾芸術事典」とする挿絵入り週刊誌で、毎号、古今東西の装飾芸術品や装飾モティーフが挿絵入りで紹介され、日本の鋳物などもしばしば掲載された。

fig.8
a-17から「菊牡丹系　日本」（エッチング:J・ジャックマール）

fig.9
b-1から「エマイユ地に金めっき銅細工の小箱」ニュウエルケルク伯コレクション（エッチング:リエヴル?）

fig.10
b-1からコロー《村の入り口》（石版画:ヴェルニエ）

fig.11
b-1から《リチャード・サウスウェル卿》（画:ホルバイン、エッチング:ル・ラ）

fig.9

fig.10

fig.11

こうした古今東西の装飾芸術を図版入りで紹介した出版物は、輸出産業のために工芸品の振興をはかっていた明治の日本にとって重要な資料となったはずである。実際、上記のc-6は、国内の工芸品制作者を指導するため、装飾図案見本を集めた『温知図録』を制作していた製品画図掛も1861-78年分を所有していたことがわかっている[7]。

3. 書籍の行方

初回の1873年12月18日分（a）のうち7冊が現在、国会図書館に所蔵されている。a-6以外には、「文部省図書部」、「東京図書館蔵」等の蔵書印が見ら

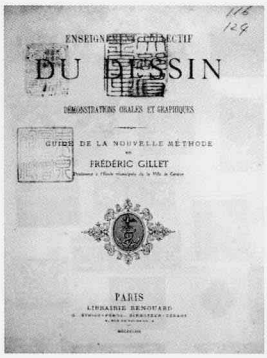


fig.12
c-8の東京書籍館の蔵書印

fig.13
a-11の文部省書庫、東京図書館等の蔵書印

れ（figs.12,13）、a-19にはさらに「明治廿［20］年十二月九日文部省交付」と交付日も入っていた。また2回目の1875年の1月28日分（b、c）は11冊が同館で確認できた。

ここで草創期の日本の官立図書館の沿革を見ておきたい。明治の博物館、図書館の設立の動きは複雑に所管を変えながら進む[8]。日本で最初の官立図書館は江戸幕府からの引継ぎ書籍を核とした文部省博物局書籍館で、1872年（明治5年）に湯島の旧昌平坂学問所内の博物館に併設された。翌年ウィーン万国博に参加するために博覧会事務局が設置されると、博覧会事務局へ併合される。事務局の中心であった町田久成は翌1874年7月、博物館と図書館を備えた大博物館設立の構想の下に書籍館を浅草へ移転させる。書籍館は浅草文庫と呼称を変え、翌年11月から一般公開された。

一方、文部省の側でも博物館と図書館の設置を主張したため、1875年、両者の管轄は文部省へ戻された。しかしこのとき蔵書は浅草文庫に残されたため、文部省はあらためて洋書を中心に書籍約1万冊を交付、ふたたび湯島に東京書籍館を開設し5月から公開する。1876年にこの東京書籍館の英語・仏語・独語蔵書目録[9]が刊行されているが、上記の1875年1月28日分（c）は、現所在の確認が取れないものもあるものの、6、7、12、13番以外、この目録の「補遺」のなかに収録されていた。しかし西南戦争の影響で明治政府は財政難に陥り、早くも1877年に東京書籍館は閉鎖される。建物と蔵書は東京府に引き継がれ、東京府書籍館として新たに発足するが、3年後に文部省管轄に復帰、東京図書館と改称する。1885年には上野の東京教育博物館（現在の国立科学博物館）と合併、89年に再び独立した。この上野時代の東京図書館の建物は当時の東京美術学校、現在の東京藝術大学の敷地内にあった。初回（a）分、少なくとも「明治廿年（1887年）」の交付日付を持つ19番は、この時期に文部省から東京図書館へ交付されたと考えられる。

こうして1873年から75年にかけて東洋語学校を通じて日本へ送られてきた書籍類は、半数は東京書籍館を経て、遅くとも1880年代末には東京図書館に収蔵された。東京図書館の蔵書は1897年には帝国図書館に引き継がれ[10]、現在の国会図書館へ伝わった。東京図書館は小規模な施設だったようだが、美校の構内に設けられたという点は興味深い。1870年代は主要な画塾ができはじめた洋画の黎明期である。1876年にはイタリアからフォンタネージらを教師に迎え、工部美術学校が設立された。ただし裸体モデルを使った本格的な素描教育が行なわれるのはパリから帰国した山本芳翠が1888年に開く生巧館画塾を待たねばならない。版画や書物の挿絵が貴重な手本の役割を果たしていた時期に、これらの書籍は当時、洋画家をこころざす画学生たちの目に容易に触れる環境にあった。またすでに東京書籍館時代、つまり1875年から76年頃、ラファエロの大型素描集や、激しい情念表現や多数の裸体が描かれたロマン主義の石版画集、あるいは同時代のフランス絵画の動きを伝えるリエヴルの出版物やカダールのエッチング等がすでに公共図書館に入っていたのだった。

4. 蜷川式胤とデュ・ブスケ

一方、この交換事業と並行し、1875年1月4日にフランスの文部省は、蜷川式胤から東洋語学校に対する日本の品物の寄贈のお礼として、シェフェール宛に蜷川（「日本の博物館長官ニナガワ（Ninagawa, directeur des Musées au Japon）」）と、寄贈の仲介役をつとめた特派員デュ・ブスケに贈る書籍も与えている[11]。蜷川には、上記表のa-4とb-2、そしてb-1に一部再録されているリエヴル『古今の巨匠たち』と、ジャックマール『陶磁器の歴史』、デュ・ブスケにはリエヴルの同上書が贈られた。このうちシャルル・ブランの『レンブラント作品集』（a-4）は同年9月に蜷川から教育博物館へ寄贈されて現在の国会図書館へ伝わってきている［国37-29］[12]。同書の見返しには、フランスの学校へ寄与したお礼に同国文部省からこの本（リエヴルと誤記）をもらったことも記されている（fig.14）。

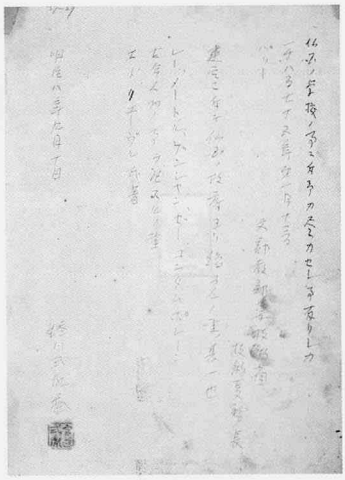


fig.14
蜷川へ寄贈された『レンブラント作品集』の見返し（著者名をリエヴルと誤記）

正倉院開帳を含む1872年の壬申調査で知られる蜷川式胤は、近年、近代日本の美術史学の見直し作業や、文化財の問題などとの関係から、新たに注目を集めている[13]。京都蜷川家に生まれた式胤は、学識を買われて1869年（明治2年）から新政府の制度取調御用掛として出仕、民法から冠婚葬祭礼までさまざまな制度の調査と整備にたずさわった[14]。制度局廃止後、いったん郷里に戻るが、1871年に外務省へ再出仕、文部省博物局御用兼勤ともなり、町田久成の片腕として社寺宝物調査や博覧会開催、博物館設置に奔走する。1871年には、荒廃していく江戸城の記録を残すため、横山松三郎に撮影させた『旧江戸城写真帖』（着色:高橋由一）も手がけた。1874年頃、蜷川が博物局、文化財行政の中枢にいたことはまちがいない。一方のデュ・ブスケ、通称「ジブスケ　治部助」は公使館の通弁官を経て、1871年11月からは左院で法律や軍事の翻訳や助言、建議をおこない、法整備を急務としていた明治政府に重用された[15]。蜷川は1872年12月にはデュ・ブスケ宅を訪れて「紙捻りの多葉粉入れ」や「草木教草四冊」を贈っており、早くから交流があったようである[16]。

東洋語学校の文書資料は現在パリの国立公文書館に所蔵され、そのなかにはシェフェールが蜷川やデュ・ブスケ、あるいは当時の文部大臣に宛てた書簡の草稿などが残されている[17]。これによると1874年10月17日、シェフェールは蜷川宛の手紙で東洋語学校の「民族学コレクション」のための寄贈の申し出に謝意を伝えている。1874年12月14日には文部省に寄贈の内訳が報告されている。すなわち、「1.日本の豪華絢爛な布見本を収録した画帖」「2.びあ［=琵琶］、日本と中国の初期の交流時にまでさかのぼるマンドリンの一種」「3.宮中装束、衣類の染色と装飾のために草木を利用した日本最初の試みの見本（長い間、帝だけがこの衣を着用する権利を持った）」「4.1500年前にさかのぼる高貴な日本人が纏った公家の帯」が寄贈され、蜷川は展示

ケースに自分の名前を入れることを希望したという。さらに翌年の2月23日にはシェフェールは文部大臣に宛てて、蜷川から届いた「芸術的、考古学的に興味深い品々」を学校の委員会で紹介し、彼を特派員とする提案に皆が賛成したと記している。その後、文部省から1875年2月26日付の任命書の副本がシェフェールに届けられた（fig.15）。特派員任命状は無事に蜷川にわたったようで、1875年9月5日付けでデュ・ブスケと蜷川からフランス側へ礼状が届いている。

残念ながら蜷川からの寄贈品は現在のINALCOでは確認できなかった。しかし付属図書館の1912年以前に発行された日本語蔵書の目録によると、少なくとも13冊の蔵書に蜷川の蔵書印があり、寄贈の旨が記されている。またそのうち『摺衣記』と題された手稿の表紙には、フランス語の手書きで「蜷川氏が博物館へ贈った宮中装束に関する解説（Notice sur le vêtement de cour offert au Musée par Mr Ninagawa）」と記されていた（fig.16）。つまり上でシェフェールが挙げた3番の寄贈品といっしょに贈られたものと推測される[18]。この手稿では、古代日本の草木染による衣服、「摺衣」の成立に関する解説がなされている。仁徳天皇の時代に広まった山藍という草の汁で模様を摺りつけた「摺衣」は、推古天皇以降に中国風の服が入ったために着用は神事に制限されるようになったという[19]。末尾には、日本の上古の沿革を述べるため、署文を付けて明治7年4月フランスの「偕覧館」へこれを贈るという趣旨が述べられ、蜷川の署名がある（fig.17）。

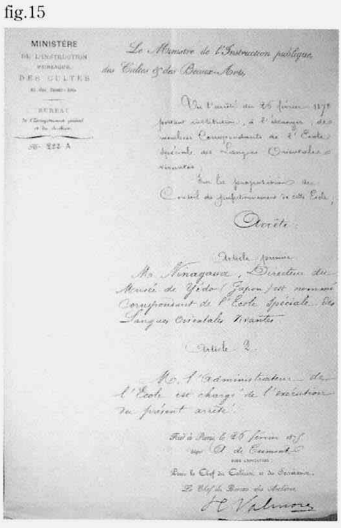
実際、蜷川は早くから服制への強い関心を持っていた[20]。社寺に残る絵画や彫刻（古器旧物）の考証にもとづき、「日本風」の服制を整えることも主張している。1870年には西洋式の軍制と洋式軍服が採用され、洋装による礼服規定が定められていくが、蜷川自身は最後まで髷を結い、明治政府の役人でありながら和装を貫いた。蜷川は東洋語学校を通じて日本古来の衣服を西洋へ紹介しようとしていたのではないか。蜷川が名高い「好古家」として、モースやシーボルトをはじめ明治のお雇い外国人や各国公使たちと広く親交を結び、「親善外交、文化交流の使命」として数々の美術工芸品を贈ったことはよく知られている[21]。判明している贈与先だけでも、「大英博物館、セーロン大学モントゥ博物館、セーブル〔ママ〕博物館、ジブスケ、オー

fig.15
1875年フランスの文部省から蜷川に宛てられた国立東洋語学校の特派員任命書の副本

fig.16
『摺衣記』の表紙

fig.17
『摺衣記』の末文

fig.15


MINISTÈRE DE L'INSTRUCTION PUBLIQUE, DES CULTES ET DES BEAUX-ARTS

BUREAU

Le Ministre de l'Instruction publique, des Cultes et des Beaux-Arts,

Vu l'avis du 25 février 1875 portant institution, à l'étranger, des emplois Correspondants de l'École spéciale des Langues Orientales vivantes;

Sur la proposition du Conseil de perfectionnement de cette École;

Décrète :

Article premier.

Mr Ninagawa, Directeur du Musée de Yedo (Japon) est nommé Correspondant de l'École spéciale des Langues Orientales vivantes.

Article 2.

Mr l'Administrateur de l'École est chargé de l'exécution du présent arrêté.

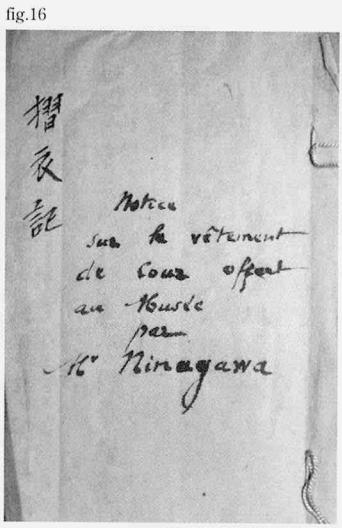
Fait à Paris, le 25 février 1875

Signé : H. de Cumont

Pour la Chef du Cabinet et du Secrétariat, Le Chef du Bureau des Sciences,

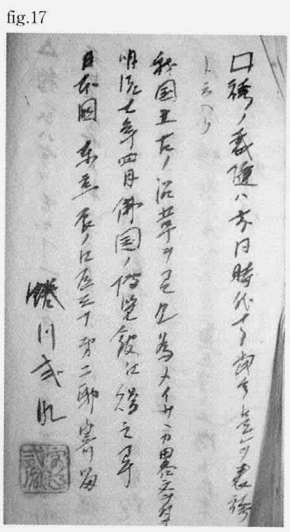
H. Velmont

fig.16


摺衣記

Notice sur le vêtement de cour offert au Musée par Mr Ninagawa

fig.17



トル、ブリング、ベンケ、モンセー、アンテルソン、シーボルト、ヘーア、セーモン、ボイントン、ワグネル」にのぼる。「ジブスケ」とは、上記のデュ・ブスケのことだろう。

5.『観古図説陶器之部』とジャックマール

さて蜷川へ贈られた書籍のなかでも、ジャックマールの『陶磁器の歴史』はとくに興味深い。蜷川は、フランスからこれらの挿絵入り出版物が贈られた翌年から1880年にかけて、明治の初期の石版画印刷物としても[22]、ヨーロッパでの日本の焼物趣味に重要な影響力をおよぼした挿絵入り出版物としても[23]注目されている『観古図説陶器之部』(7冊［城郭之部と未完巻を入れれば10冊］)を出版するのである(fig.18)。

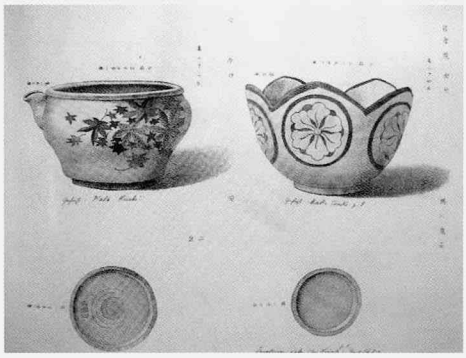


fig.18
蜷川式胤『観古図説陶器之部』から

1876年、蜷川は自宅に石版画印刷機械を設置して「楽工舎」を開き出版を進めた。彼自身、印刷局のお雇い外国人ボニントンに石版画術を学んだようだが、図版の制作は玄々堂の亀井至一が手がけ、川端玉章が手彩色をほどこした。土器までさかぼって日本の焼物を産地ごとに図版で紹介したこの和綴じの書は、10ページ前後の蜷川の本文に、器の側面の絵柄と底面の銘をそれぞれ描いた精巧な図版頁が続き、日本の焼物総覧といった体裁である。

一方、『陶磁器の歴史』(1873年)の著者アルベール・ジャックマール(1808-1876)は東洋陶磁器のコレクター、研究者として知られる。息子の著名なエッチング版画家ジュールと組んで、装飾芸術に関する挿絵入り出版物を多数手がけ、1864年に設立された産業応用芸術中央連合でも活躍した。東西の磁器の歴史を詳細にたどった大著『磁器の歴史』(1861年)は上記表のa-17にあたる。ここでは、とくに早くから重要な陶磁器輸出国だった中国と日本に関しては古代史から紐解いて詳細に分類し、底面の年号の見分け方なども紹介している。また両者の違いを比較し、日本の絵つけの特徴として気まぐれや芸術的な自発性も挙げている。(IIe partie, p.321)その後のジャポニスムの展開を考えると興味深い指摘だが、焼物全体の歴史を取り上げ、その後、版を重ねていく1866年(-1869年)刊行のハンディな『陶磁器の驚異 I 東洋』(II 西洋、III 現代)の中では早くも、日本が西洋の好みに迎合し、今や模倣物を送り出そうとしていると急変ぶりを嘆いた。1867年、幕府や薩摩藩、佐賀藩がこぞって工芸品を送りこんだパリ万国博を経た1868年の同書第二版では薩摩焼の情報などが追加されているが、論調は同様である。

fig.19
『陶磁器の歴史』(1873)から、「日本 菊牡丹系 獅子と水からはね出る鯉」、ギュスターヴ・ロトシルト男爵コレクション

1863年の著作と同様、多数のエッチング図版を挿入し、大判の1冊にまとめた1873年の『陶磁器の歴史』は内容的には『陶磁器の驚異』を概括したものである(fig.19)。日本語に堪能なデュ・ブスケを通じて同書を入手した蜷川が、その内容を知らぬわけはない。西洋諸国で東洋の陶磁器が熱心に蒐集されて美麗な書籍で立派な図版とともに紹介されていることに刺激を受けただけではなく、明治政府となってさらに拍車がかかっていた日本の輸出

振興策への危惧も新たにしたのではないだろうか。蜷川自身、『観古図説』の序文で、新しいものばかりが好まれて古いものが軽んじられる昨今の風潮を嘆き、日本の古物の見直しを説いたが、当時、来日した多くの西洋の文化人たちは日本の急速な西洋化を案じていた。

蜷川は『観古図説』編纂にあたって当初から欧米各国への輸出を念頭に置き、表紙には欧文タイトル「*Kwanko dzu setsu. Notice historique et descriptive sur les arts et industries japonais par Ninagawa Noritané. art céramique*」を併記した上、最初の5冊にはフランス語とドイツ語訳の別冊を付け、築地のアーレンス商会から販売した。このフランス語序文にはデュ・ブスケが関与した可能性が推測されているが[24]、今回の調査で判明した蜷川とデュ・ブスケの関係はその重要な裏づけとなるともなるだろう。教育博物館に寄贈されたレンブラント作品集以外、蜷川に贈られたはずの書籍の所在は不明である。しかし陶磁器の蒐集と学識で知られる蜷川だけに特別な関心を持ち、手元に残した可能性は高い。

6. おわりに

明治初年、1873年から75年頃、フランスの美術や産業芸術の動向を伝える挿絵入り出版物がパリの国立東洋言語学校を通じて日本へ贈られ、その多くが公共図書館へ入っていた。また同じ頃、1875年、文化財行政に尽力した役人にして好古家としても名高い蜷川式胤が東洋語学校に日本の古い装束などを寄贈し、これによってフランスの文部省から同校の特派員に任命されるとともに、古今東西の陶磁器の歴史をつづった挿絵入り出版物などが贈られていた。蜷川は同時期に日本の文部省へ贈られてきた出版物も目にしていたことだろう。日本の古物の見直しを説いていた蜷川は、翌年から1880年にかけて、日本各地の陶磁器を紹介する『観古図説陶器之部』を出版する。一方、殖産興業をはかる明治政府も1875年から85年にかけて工芸図案集『温知図録』を刊行していく。

19世紀後半、芸術・文化の産物が国が保護すべき歴史遺産として、あるいは産業の発展のために利用すべき文化資本として認識され、その情報をイメージとテキストで記録、伝播しようとする動きは各国で見られる。「多くの貴重な品々から選び出すこと、もっとも興味深い品々を版画で複製すること、そして壮麗な書物にすべてを集めること」は、「芸術の観点からは喜ばしい考えであり、産業がそこから引き出しうる応用物にとっては実り豊かであり、執筆家や学者にとっては興味深い」ものであった[25]。日本に贈られてきた出版物のその後の行方の調査や反響の考察は今後の課題である。しかし今回の調査結果は、欧米からの新しい情報の流入を前にした明治の美術と文化をめぐる動きを西洋との同時代性のなかで考察するための興味深い東西の結節点となりそうである。

[1] 本調査研究は平成18-20年度科学研究費若手（B）の助成による。

[2] Colette Meuvert, «Bibliothéque», *Cent-cinquantenaire de l'Ecole des langes orientales*, Paris, Imprimerie naionale, 1948, p.397. 以下、同校図書館の沿革については同記事によっている。

[3] 『パリ東洋語図書館蔵日本書籍目録・1912年以前』、人間文化研究機構、国文学研究資料館編、2006年。

[4] フランス国立公文書館（Archives nationales, 以下、ANと表記）が所蔵する文部省関係の公文書からF21 702。同館の文書の請求番号は以下、ANの後に記す。

[5] AN F21 493.

[6] *Ibid.*

[7] 横溝廣子「明治初期デザイン教育資料としての西洋図案集――農商務省の博物館および東京美術学校収集資料について」『明治・大正期における図案集の研究――世紀末デザインの移植とその意味――』（平成11-13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書）、67-69頁。横溝氏からは明治の図案集について貴重な情報をいただいたことを謝して記します。

[8] 沿革については、以下、関秀夫『博物館の誕生　町田久成と東京帝室博物館』、岩波新書、2005年による。

[9] *A classified catalogue of the books in the English, French and German languages of the Tokyo Shoseki-kwan*, 1876.

[10] 関前掲書、114頁。

[11] AN F21 493.

[12] 藤元直樹「稀本あれこれ―444―シャルル・ブラン編『レンブラント作品集』」『国立国会図書館月報』527号、2005年2月［頁なし］。

[13] 蜷川に関する近年の文献としては、米崎清美『蜷川式「奈良の筋道」』、中央美術公論、2005年、今井祐子「19世紀後半のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成」『表現文化研究』1号、2001年、1-12頁、同上「西洋における日本陶器蒐集と蜷川式胤著『観古図説陶器之部』」『ジャポニスム研究』22号、2002年、21-35頁、鈴木廣之『好古家たちの一九世紀――幕末明治における《物》のアルケオロジー』、吉川弘文館、2003年などを参照。

[14] 米崎前掲書、440頁。

[15] デュ・ブスケについては梅渓昇『お雇い外国人⑪政治・法制』、鹿島研究所出版会、昭和46年等を参照。

[16] 米崎前掲書、385、389頁。

[17] AN 62AJ59に宛名等のアルファベット順、日付順に入っている。

[18] 1874年の書籍受入簿に記載がないため、1873年の時点で送付されていた可能性もある。

[19] この手稿の読解は横山遥氏にご教示いただいたことを謝して記します。

[20] 米崎前掲書、440-443頁。

[21] 蜷川親正「2モースの陶器収集と蜷川式胤」『共同研究　モースと日本』、守屋毅編、1988年、402頁。

[22] 増野恵子「日本に於ける石版術受容の諸問題――蜷川式胤『観古図説　陶磁器編』」『近代日本版画の諸相』、1995年、165-211頁等。

[23] 今井前掲論文、2002年や、ニコル・ルマニエール「英国ヴィクトリア時代の日本陶磁器蒐集A・W・フランクス、蜷川式胤と大英博物館」『美術フォーラム』5号、2001年、101-110頁を参照。

[24] 今井祐子「明治期の在留フランス人と蜷川式胤」『EBOK』17号、2005年、65頁。

[25] R. M. [René Ménard], “Works of art in the collections of England by Edouard Lièvre”, *Gazette des beaux-arts*, février 1873 (t.7, 2e pér.), p.172.

Report on a Study of Art Interaction between Paris's École des langues orientales vivantes and Japan during the Meiji Era: Scheffer, Du Bousquet, and Noritane Ninagawa

Megumi Jingaoka

Many countries witnessed movements in the latter half of the 19th century to recognize the products of art and culture as part of historical inheritance, as information of use to industry, and to record and diffuse these works in the form of richly illustrated books. The illustrated art books that were part of this trend were presented to Meiji period Japan in 1873-75, almost immediately after the opening of Japan to the world, through the offices of Paris's École des langues orientales vivantes. The majority of the books were given to the barely established public library in Japan, and have been handed down in today's Diet Library.

At the time, the director of the Paris school, Charles Scheffer, entered into book exchanges with various foreign governments through his correspondents. The books presented by the French in this exchange were books published by the school itself and books presented by the Ministry of Cultural Affairs, amongst others.

The publications presented to Japan, firstly, were large-scale illustrated publications that introduced the cultural heritage of France, and other countries, such as ancient ruins and treasures of cathedrals, through photographic plates. The books also notably included large-format illustrated publications such as painter's monographs or books related to art education and industrial arts.

Further, in 1874, a famous antiquarian who worked towards the development of cultural properties administration, Noritane Ninagawa, presented old Japanese costumes and other items to the school in Paris, through the intermediary of Albert Charles du Bousquet, one of the correspondents of the school. In acknowledgement of this gift, the French Cultural Affairs administration nominated Ninagawa as correspondent of the school and offered such important publications as an illustrated history of ceramics covering all periods antique to modern, east to west. The remarkable thing is that immediately after that presentation, from 1876 to 1880, Ninagawa published volumes of his now famous *Kwanko dzusetsu* book introducing the ceramics from Japan's various regions through high quality lithographs.

A subject for later research is the destination and reception of these books after their presentation. However, certainly, this case can be a good starting point for a reconsideration of how Meiji art and culture faced the introduction of new information from the west, in the context of contemporaneous movements in Europe.